

和歌山市磯ノ浦沖合で漁獲されたアマゴ

久保 喜計・細谷 和海

近畿大学農学部環境管理学科

Amago salmon, *Oncorhynchus masou ishikawae* Jordan and McGregor, caught off the Isonoura coast, Wakayama City

Yoshikazu KUBO and Kazumi HOSOYA

Department of Environmental Management, Faculty of Agriculture, Kinki University

3327-204 Nakamachi, Nara, 631-8505, Japan

Synopsis

A live individual salmon was caught by a local round haul net off the Isonoura coast, Wakayama City. The fish, about 20 cm in standard length, was identified by a photo as an Amago salmon, *Oncorhynchus masou ishikawae* Jordan and McGregor. It is quite notable that the fish seems to have migrated to this marine area while keeping fluvial characteristics on its body. Countermeasures to protect the possible native population of its sea-run form, Satsukimasu, were discussed.

2003年3月9日に和歌山県和歌山市磯ノ浦沖合 (Fig. 1) で操業していた旋網漁の漁獲物中に体長約20cmのアマゴ *Oncorhynchus masou ishikawae* とされる個体 (1個体) が混獲された。この個体は漁獲物である大量のサヨリ *Hyporhamphus sajori* の水揚げ時に見失われ、残念ながら標本として確保することはできなかったが、鮮明な写真撮影 (Fig. 2) と詳細な観察記録が資料提供者により行われていた。

記録写真によると (Fig. 2・B)、その体側には、パーマークならびに朱点が鮮明に現れており体はやや細長く、体高は低く、明らかにアマゴ型である。また、資料提供者によると体断面は丸みを呈し、背中線部や背鰭ならびに尾鰭の先端部は銀黒色を呈し、特に背中線部の鱗は粗いが、はげ落ちることはなかったという。これらの形態的特徴から本個体は、銀化 (スモルト化) の極めて初期の段階であると思われた。降海型アマゴの降下時期や体形質についてはあまり詳しく判っていないが、加藤¹⁾ は、木曾川河口ならびに伊勢湾沿岸海域において、1968年1月下旬～2月上旬に採捕した11尾 (体長14.4～21.0cm) について次

のように記載している。すなわち、「計数形質はアマゴの特徴に属するもので、外観は体高が比較的低く、体側は銀白色に輝く。パーマークが消失し、背鰭先端は黒色斑を有する。鱗は非常にはげやすく、手に持つと取れてくる。胸鰭と腹鰭は無色。尾鰭後端は黒色をおび、上縁と下縁にはまったく赤色部がないか、あってもきわめて薄い。これら降海型アマゴは銀化現象を起こしており、一般のマス幼魚 (スモルト) としての特徴を有する」。これらの記載事実を考慮すると、今回の捕獲個体は完全にスモルト化する以前で、アマゴの形質を色濃く残した状態で降海したものと推定され、このような例はきわめて稀であると思われる。なお、本個体の捕獲周辺海域からの海洋生活形サツキマスの記録は、1985年5月2日に和歌ノ浦湾の定置網で1個体²⁾、また、同様に和歌ノ浦湾の定置網で1987年4月22日に1個体、1989年4月21日に4個体および1990年4月22日に1個体が採集されている (平嶋健太郎、未発表資料)。なお、磯ノ浦と和歌ノ浦との距離的な関係は Fig. 1・B に示す通りである。捕獲個体とその周辺海域および木曾川河口ならびに伊勢湾沿岸海

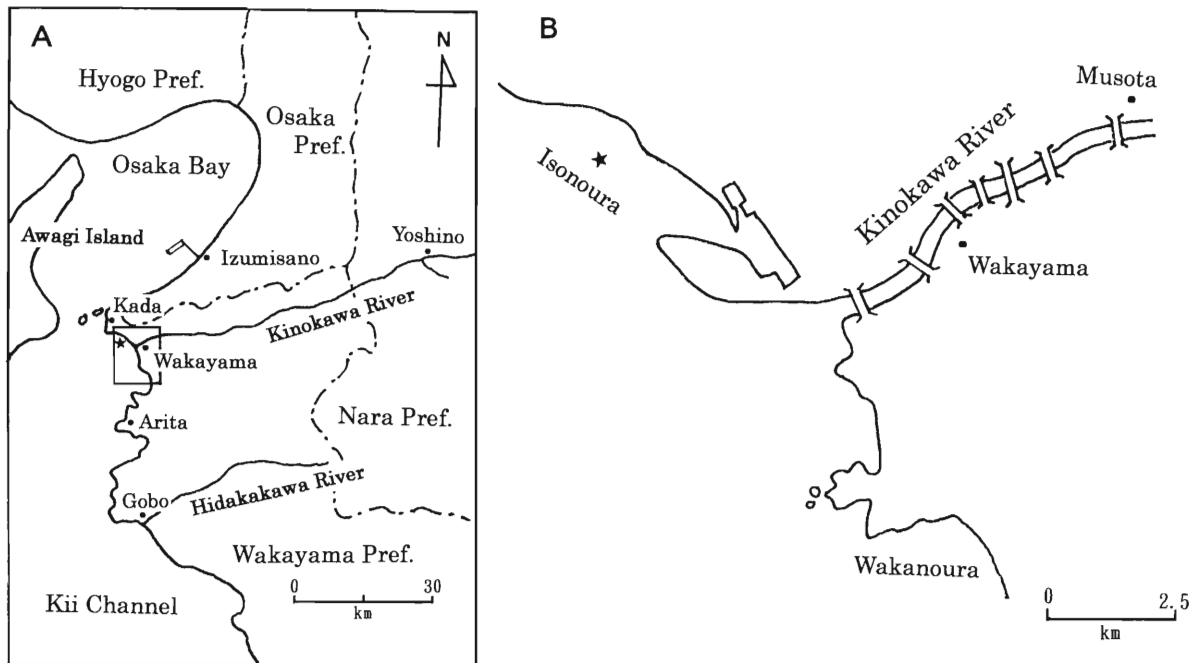


Fig.1. A: Map of the offshore of Wakayama City showing fish catching site (★). B: Detailed map of the fish catching site.

域¹⁾における降海型アマゴの出現時期から、本種の降下時期は冬季から春季のかなり長い期間に渡るものと推察される。

本個体の由来は、その捕獲場所から紀ノ川である可能性が高いと思われるが、サツキマスが同河川内で採集された記録は、1966年2月22日に上流の吉野川での1個体³⁾と1993年5月17日、和歌山市六十谷の堰下流で刺し網による3個体(平嶋健太郎、未発表資料)である。なお、平嶋によれば、同六十谷付近で毎年釣り人により釣り上げられているようであるが、公式の記録としては残っていないとのことである。

和歌山県レッドデータブック⁴⁾では、本県にはサツキマスの自然個体群が分布したが、現在では産卵場が確認されていないことなどから絶滅したと考えられるとあり、紀ノ川におけるサツキマスの自然個体群も同様に絶滅したと考えられる。このため、これらの出現は、紀ノ川の上流部で放流されたアマゴが流されて銀化したサツキマスであると考えるのが最も妥当であると思われる。しかし、紀ノ川には多くの支流があり、これらの上流の未調査域においては、自然個体群の残存の可能性は大いにあると思われ、このような個体が流下したとも考えられる。なお、周辺の海上釣り堀の生き餌として生きアマゴが使われており、それ

らが逃げ出したという可能性もあるが(平嶋健太郎氏私信)、筆者らの聞き取り調査によれば、活餌に用いられるアマゴは体長が10cm程度で、今回の捕獲個体に比べてかなり小型であること、淡水から海水への急激な移行により斃死することからその可能性は低い。

サツキマスは西南日本の太平洋側に生息するアマゴの分布域と重なって広く生息していたが、近年では激減し、現在その自然個体群は長良川と伊勢湾にいくらか生息する状況にある⁵⁾。紀ノ川においても古くは河川のマスのとしての漁獲量の記録が残されている⁶⁾。本種の減少は、ダムや堰堤などの魚の遡上や降河を妨げる工作物の構築、水質汚濁(特に河口域)などにあると言われている。紀ノ川においても下流域から上流域にかけて多くの堰が作られ、現在も建設が計画もされているが、これらがサツキマスを含めて通し回遊魚の遡上・降河を妨げる一因となっており、適切な魚道の設置や改修を行わなければならないであろう。また、中・下流域における水質汚濁の改善、さらに、上流部における産卵場の整備などの対策を講じることは、紀ノ川におけるサツキマスの復活に欠かせないと思われる。

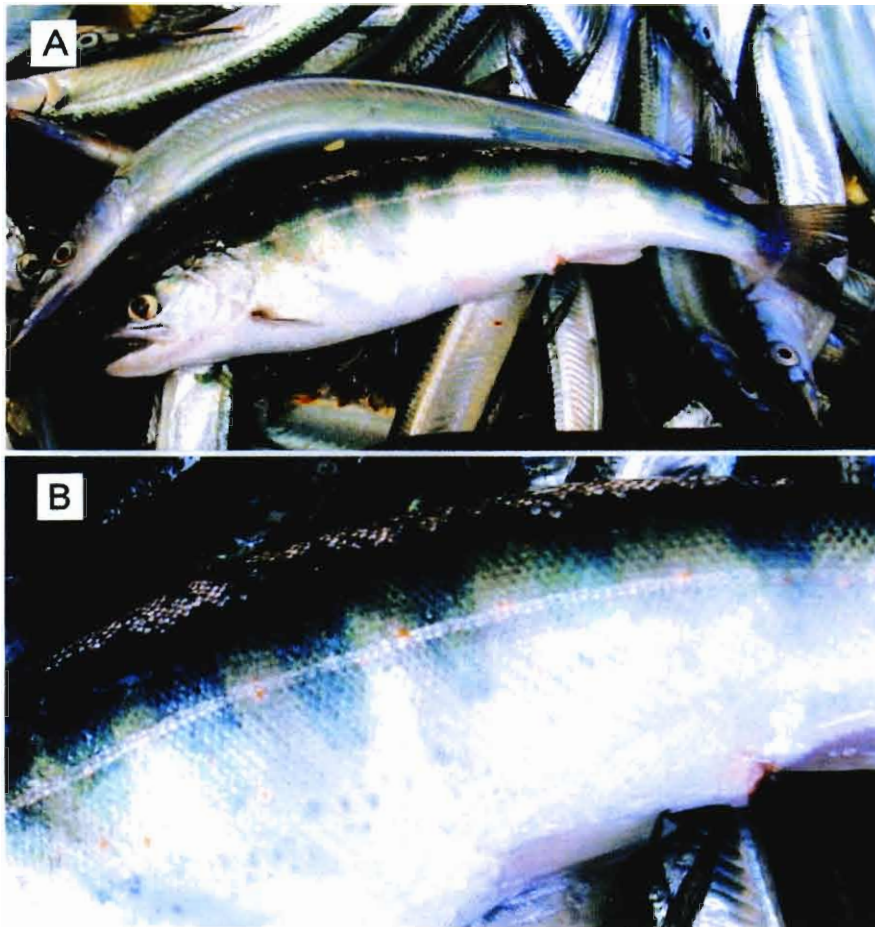


Fig.2. Amago salmon, *Oncorhynchus masou ishikawae*, caught off the Isonoura coast, Wakayama City in March 9, 2003. A: General view of the fish about 20cm SL, contaminated in Sayori, *Hyporhamphus sajori* by the round haul net. B: The body side showing parr marks and red spots.

謝 辞

記録写真や観察記録などの資料を提供された和歌山市元脇の中善商店の中村諄彦・中村真理両氏に深謝するとともに、和歌山県立自然博物館の平嶋健太郎氏には貴重な文献・資料の提供や助言をいただきお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 加藤文男, 1968. 長良川のカワマス. 木曾三川河口資源調査報告, 5: 895 - 903.
- 2) 小阪 晃・丸山清重, 1987. 和歌浦湾における小型定置網にみられる魚類相. 和歌山県立自然博物館館報, (5): 31 - 41.
- 3) 水野信彦, 1966. 奈良県吉野川でギンケのアマゴを採集. 淡水生物, 11: 1.
- 4) 和歌山県環境生活部編, 2001. サツキマス(降海型・自然個体群). 保全上重要なわかやまの自然-和歌山県レッドデータブック-: 95 - 96. 和歌山県環境生活部, 和歌山.
- 5) 加藤文男, 1995. サツキマス. 日本水産資源保護協会編「日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(II)」: 345 - 352. 日本水産資源保護協会, 東京.
- 6) 農林水産局, 1937. 河川漁業. 第6 (1927 - 1931), 194pp.